

幡多高校生ゼミナールと四万十川を訪ねる旅

2022年 8月21日(日)～22日(月)



山下正寿さんと幡多ゼミナール卒業生のみなさん

それぞれの心、あふれ出ている
言葉にならない気持ちが
言葉にならない思いが
この肌を通りぬけて伝わっていく
あああ
みずみずしい朝露のように
あの時の
いつの日か出会うと思ったときめきが欲しい
帰っておいで、帰っておいで、帰っておいで
帰っておいで、帰っておいで、帰っておいで
帰っておいで、いつでも帰っておいで
帰っておいで、帰っておいで、あなたのもとへ
あなたの山へ あなたの川へ あなたの海へ あなたの空へ
帰っておいで、帰っておいで、あなたのもとへ



幡多ゼミOG村井真菜さんと洋平さん

第 11 回エバーグリーン平和の旅 高知幡多ゼミナールへ

ー感動するところ、人との出会いー

山口良二

まさか本当に実現するとは

まさか本当に実現するとは思わなかった。「2022 全国教育の集い in 高知」が 3 年ぶりに現地でも開催されることになった。この機を逃しては高知、そして更に車で 2 時間半もかかる幡多ゼミナールを訪れることはないだろうと、皆で思い切って、出かけようということになった。

しかしながら、コロナ感染は拡大を続け、オンラインでの会議も準備されている中、はたして、現地を行っても良いのだろうかとの迷いが続いた。実際、幡多での行動も当日まで、なかなか定まらなかった。被爆された元漁師の方々が感染を心配し参加を自粛されることを、コーディネートしてくれていた上岡さんから伺ったのは大会数日前だった。それでも上岡さんから、8 月 21 日（日）の午後に、山下先生が幡多ゼミナールで、ゼミ卒業生と一緒に我々を待っていてくれることを伺い、望外の喜びを胸に高知へ向かったのだった。以下、それも含めて思い入れの多い旅だったので、私的なことも含めながら記録としてまとめさせてもらう。

教育フォーラム全国教育のつどい in 高知・開幕 8 月 19 日(金)

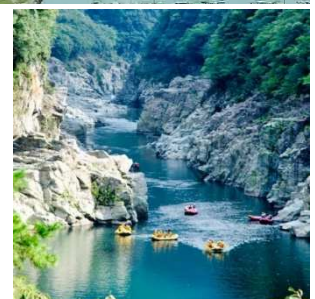
一足先に出発した粕谷さんは、8 月 19 日の教育フォーラム「平和な未来を子どもたちとともに」に参加。自分はその様子を自宅からオンラインで視聴する。「ロシアのウクライナ侵略にどう向き合えばよいか、平和教育、反核平和運動をどう広げ、どうつないでいくか。学校でどう取り上げたら良いか。」何名かのパネリストから報告がなされる。その中に、幡多ゼミナールの卒業生、現在は地元の議員であり、音楽家という村井眞菜さんが登場する。すると会場からの質問の時間に粕谷さんが、幡多ゼミが焼津平和賞を受賞した際に焼津でお会いしたこと、また再びこうやってお会いできたことの喜びを語るではないか。その言葉で自分も焼津市民文化会館で眞菜さんを含む幡多ゼミのメンバーと交流したことを思い出す。この後、眞菜さんとさらなる出会いがあることをこの時は知る由もない。

教育の集い分科会「平和と国際連帯」8 月 20 日(土)

静岡から乗った新幹線は午前 11 時過ぎに岡山駅に。駅弁を買い、特急「南風 5 号」へ。岡山の児島をでると、ほどなく瀬戸大橋へ。瀬戸内海に浮かぶ島々、遠くには四国の山々が見えてくる。いつ見ても瀬戸内海は穏やかな日差しに溢れている。

その後、列車は、琴平、阿波池田と進み、徐々に高度を上げ、山々の中を、線路の両側から伸びた木々に車体をバチバチとあてながら走る。やがて、眼下に渓谷、ラフティングを子どもたちに教えているスクールの風景も見えてくると、列車はいつの間にか徳島に入っている。大歩危駅を過ぎると、祖谷の「かづら橋」の案内が見える。

これまで生徒に高知の大学も遠くないぞと薦めてきたが、こんなにも遠くだったのか。列車が奥深い山々を抜けると、一気に田畑や町が開ける。今までになかった海の明るさだ。



12 時 30 分、高知駅に到着、大きな町だ。四国山地を超えてきたので余計に町の大きさを感じる。教育の集い分科会「平和と国際連帯の教育」は高知駅から数駅西にある旭駅からほど近い男女共同参画センター「ソーレ」で開催されている。高知駅からそのまま土讃線普通電車に乗り換えて、旭駅で降りて会場に向かった。



この分科会では各地の平和への取り組み実践報告を聞く。修学旅行で、総合の時間で、家庭科や歴史の授業の中で行われた全国の実践は何れも興味深いものばかり。あっという間に 1 日目の分科会が終わる。路面電車に乗り、今日の宿であるドーミーインに荷物置いて夕食に街に。はりまや橋を見た後、カツオ藁焼きで夕食。



「平和と国際連帯の教育」分科会Ⅱ/幡多ゼミへ 8月21日(日)

二日目の日曜の朝、朝市を見学。なんと大きな朝市か。名産の刀物から食料品まで高知城へまで続く。金魚品評会、石樋を観ながら山内一豊と容堂に思いを馳せ、天守閣を望む。

9時半から分科会、小宮山勝人さんから長野の篠ノ井高校、「高校生が化ける」、埼玉の正盛大眺さんの「ホロコーストの種は誰もが持っている、その種を芽生えさせない」、出版労連の吉田さんから「知識だけでなく感性としても平和をとらえる」の報告を聞く。エバーグリーンも、満蒙開拓団の歴史を学び、平和展で発信、だまされないために、楽しむこと、面白がることが大切、学校での学びがやらねばならないことになっていることが問題、仕事も活動も同じ、伝えようとする事によって楽しくなる事等を報告する。

12時に分科会を抜け、レンタカーで幡多へ向かう。『核兵器は30年後になくなる』について考える』と題した実践を報告した濱田郁夫先生(高知県教職員組合 高知民主教育研究所)や多くの先生方からも「良いですね。楽しんでください」という言葉をかけられる。



幡多ゼミナールへ

旭駅で岡崎航平君が合流し、伊野 IC から高知自動車道へ。ほどなく四万十川とその美しさが並び称される仁淀川が見えてくる。その後、高知道は海岸線へ、須崎の町に入り、美しい海を臨む須崎港が見えてくる。道の駅「かわうその里須崎」で小休憩後、クジラの見える町、黒潮を過ぎて四万十（中村）に入る。土佐くろしお鉄道（中村・宿毛線）を左右にみながら日本の原風景のような田園地帯を走る。



やがて映画「ピキニの海は忘れない」に出てきた幡多ゼミナールの建物が見えてくる。山下正寿先生と奥さん、そして幡多ゼミナールの卒業生 4 名が迎えてくれる。久保山すすさんから譲り受け育ててこられた愛吉すずのバラや、皆で建てたという研修施設を案内していただく。高校生たちと 40 年に渡って調査活動をしてきた歴史の重みを感じる。



粕谷さんによる司会で、山下先生との出会いやエバークリーンとの関わりなどが紹介された後、自己紹介を行う。幡多ゼミを卒業して 30 数年経っている方々だが、今の職業、生き方にも幡多ゼミで学んだことが影響しているようだ。

その後、山下さんが幡多ゼミを作った経緯を語ってくれる。

1945 年に幡多の港町に生まれる。ご両親はお菓子屋さんを営んでいたという。1954 年、9 歳の時にピキニ事件が起きる。お店によく来てくれていた若い漁師さんたちが次々に体調を崩し、20 代、30 代の若さで白髪となり、声がでなくなり、リンパがはれていった。東京の大学で学んだあと、地元に戻って教師となり、高校生たちと活動を始めて、初めてピキニ被ばくの実態を知る。「なんであんな若く元気だった漁師たちが早くに命を落としていったのか。これは絶対に許せん。」と思ったという。被ばくした漁師や漁船は一銭の補償もされていない。

その後、ダム工事に朝鮮人の強制労働があったことを聞き取りで知りゼミの高校生たちと韓国へ行く。若い人たちがどうしが交流することによって、平和を築きたいという思いだった。ダムのそばに慰霊のモニュメントを作った。その後、福島原発事故が起こり、生徒たちと福島へ。全国の高校生たちと



原発や未来のことを話し合った。そこにはエバーグリーンの若者たちも合流した。現在は沖の島探求セミナーを計画中。過去を学び、今をつなぐ。塩づくりなどを学ぶという。この後、自由に質問などをさせていただく。

「こういう活動を続けていくには何が必要ですか？」の問いに次の3つのことを挙げてくれる。

「教員が連携をつくっていくこと」

高校3年間は短い、自分の生き方を考える大切な時間。幡多ゼミに来れば、自分が出せる、何を言ってもいいんだ、という場の中で高校生たちは自分の生き方を考え、変わっていった。だからあえて「平和」ということばは冠していない。

「自然の素晴らしさ、五感を高める、人と会う場にしてきた」

楽しいから続く。教師という仕事は一番、自由でゆとりが必要な仕事。教師は生徒よりも先に「感動するところ」を持つことが大事。

「聞いたからこそ、伝えたい気持ちを大切に」

自分の足元をみつめる目、学びを大切にしている。自分の住んでいる地域の人に話を聴く。

違った受け止め方をしている人がいることの気づきも大切。目線をどこに置くか、立場の弱い人に目線が自然と注がれてきた。



「幡多ゼミはどんな場でしたか？」

次は卒業生の方々に質問をした。

- 自主的なゼミということでメンバーになった。沢山の人の出会えたことが幸せ。卒業後は社会学を学びに大学へ進学した。(橋崎さん)
- 自由な雰囲気を求めて。羽目を外して活動の目的についてお互いに真剣に話し合ったことも。そういった活動を通して、自分も高校生たちと同じ時を過ごしたく、高校の教員になろうと思った。自分が社会と確実に関わっているという実感。ゼミに入って初めてそれまでのモヤモヤとした霧が晴れたという思いになった。間違ってもいいという雰囲気が嬉しかった。(近藤さん)
- 同じ高校の同級生に誘われて。いろんな高校の生徒たちと泊まりで話し合い、楽しかった。



この奇跡のような出会いに何と感謝すればよいのだろう。岡崎君が、自分が作ったお茶をお土産として皆に手渡し、一緒に写真を撮る。この四国の幡多から、高校生たちと地道な調査、活動を起こし、それが、映画「ピキニの海は忘れない」



「渡り川」、「種まきうさぎ」を生んでいった。活動は幡多から室戸、韓国、福島、焼津、ピキニ被災訴訟と大きく広がっていった。この幡多ゼミから何を学び、どう連帯できるかを帰途、思いは広がっていった。

渡り川（四万十川）へ 8月22日（月）

翌日、あの村井眞菜さんを四万十川に訪ねる。四万十川はその昔は「渡り川」と呼ばれていたという。その名の通り、大きな川沿いの県道を車で登ると、目当ての沈下橋が次々と見えてくる。沈下橋というのは大雨で増水しても川に沈んでしまうことで流されないように設計された欄干のない橋のことで、この地域の人がいかにこの四万十川の生活を大事にしたかが伺える。

眞菜さんは木工職人の旦那さんと山奥に住むというので、あの程度は想像していたが、到着すると想像を超えるワイルドで自由で、アーティステックな生活ぶりに驚く。



眞菜さんはリクエストに応じて、なんと河原でギターを抱えて自作の歌を歌ってくれる。緑の山々に青い四万十、そこで泳ぐ子ども達、背景に流れる歌声、この思いがけない野外フェスの光景は、幡多ゼミの思い出と共に一生忘れないだろう。



もう一週間くらい、この四万十でボーと過ごしたいという思いを抱きながらも、お昼過ぎに、高知駅に戻る。幡多ゼミの駐車場でお腹をこすったレンタカーも免責で済みほっとする。

帰りの電車の中で、この日の朝早く、自分の大好きな映画「祭りの準備」（1975年 ATG 黒木和雄監督作品）の舞台となった中村駅やその周辺を歩くことができたことの喜びをかみしめる。繰り返し見たこの映画の舞台を訪れることができたのも、自分にとって本当に大きな幸せだった。

この旅を通して、感動するところ、人との出会い、住んでいる地域を大切にすること、疑問に思うこと、五感を大切にすることの大切さを改めて思った。山下先生や幡多ゼミの皆さん、そしてこの出会いに感謝の気持ち一杯で、夜遅い焼津駅に降り立った。何とも贅沢で思い出深い平和の旅だった。

東京への旅 東京大空襲・戦災資料センター

コロナ感染症が広がってから、ほとんど静岡県内から出ることがなかったが、今回久しぶりに東京と高知へ行くことを決断した。3年間どこにも出かけないで、このまま過ごしていったら安心かもしれないけれど、何も変わらないまま年を重ねてしまいそうな気がしたからだ。特に、以前韓国平和の旅に同行した深田しずくさんが東京行きに同意してくれたことも大きかった。直前まで、外務省訪問の前にどこへ行くか迷ったが、東京大空襲・戦災資料センターを訪問することにした。センターの前で「世界の子どもの平和像」を見ることもできた。略して「せこへい」。資料館では、空襲の範囲を確認したが、この後訪問する外務省のあたりも当然火の海と化していることがわかり、その被害の大きさを思った。また、驚いたのは、防災法なる法律によって、火事を消さないと罰金刑が課されたことだ。「爆弾はさく裂した瞬間しか爆弾ではない。あとは、唯の火事ではないか。ただの火事を、君は消そうともせずに逃げ出すてはあまい。」などという言葉も。そして、「アメリカ渡来の害虫一ザリガニ殲滅戦」の記事も……。以前どこかの劇団の「東京大空襲」という演劇を見て、四方を火の海に囲まれて逃げるすべもない事実を目の当たりにしたのが、今でも印象に残っている。浅草寺あたりも孤児が生活していた写真を見た事があった。現在の風景の中に、そのような残像がある。

東京への旅 外務省・ロシア・ウクライナ大使館訪問

さて、その後外務省に向かい、各地の高校生と合流した。コンビニで食料を調達したかったが、官庁街は表通りにはない。そこで、裁判所の中のコンビニをめざした。裁判所の入り口では、裁判のピラを撒いている人がいた。中では、手荷物検査と身体検査があった。コンビニに行くだけでも大変である。外務省前で、まずは高校生から自己紹介を始めた。今回は、広島、沖縄からも参加者がある。オンライン会議で目にしたことのある仲間と実際に顔を合わせての貴重な機会だ。その後、大人も簡単に自己紹介し外務省前で記念撮影。そして、中へ。外務省の若手担当者に「核兵器禁止条約への批准を求める署名」を渡して、各県からの質問。それに対する応答。そして、最後に被爆者の代表として児玉三智子さんの発言があった。その言葉には重みがあり、この声こそが本当なのだろうと思った。今回外務省の中に軍備管理軍縮課という部署があるのを初めて知った。しかもその方が、前は中国有事が何かの担当であったといい、「現実は厳しい。」と述べていたのを聞いて、これでは一向に核廃絶の方向には進まないと思った。まったく逆の部署の担当者が軍縮課とは。核廃絶を進めないように意図的に配置しているとしかいいようもない。外務省担当者の心性を信じたい。詳細は、「高校生署名活動の記録」（平和ゼミナール出版）を。



その後、ロシア大使館への訪問。途中でブラカード作成。画用紙にマジックでおのおのの思いを書いた。沖縄の高校生は「命どう宝」。ロシア大使館前は、厳重警戒がなされていた。右翼の街宣車の侵入を防ぐためだそう。 「軍事行動に対する抗議」という点では方向性は同じだそう。近くの交差点の隅で、シュプレヒコールをあげて、その後は高校生代表が5人ぐらいつつ2チームに分かれて、ロシアへの抗議の署名を届けた。その中に、藤枝市の平和展で書いた高校生のメッセージを入れてもらった。「ロシアの芸術をいつか見てみたい。」「タイガが有名なので見てみたい。」「ロシアの冬の山の景色が白くてきれいで好きです。いつかオオカミと遠吠えしたい。」「ロシア料理やロシア文化が好きです。日本と仲良くしましょう。」「いつかロシアへ行ってみたい。」などと友

好を望むものであった。政府や国のレベルではなく市民同士の思いを大切にしたい。

ウクライナ大使館までは結構距離があり、その間何機もの飛行機が頭上を通過した。大きな機影を見るのは楽しかった。しかし、生活者にとっては嫌なものだろうと思った。藤枝市のバスの中部国道本線よりひっきりなしであった。大使館前には、ロシア侵攻で被害を受けたところの写真が掲示されていた。各県の代表がメッセージを伝えた後、深田さんが藤枝市の平和展での高校生のメッセージを手渡してくれた。「大変だと思いますが、いつの日か笑える日が来ることを祈っています。」「アサガオを書いてみました。みなさんに幸福がおとずれることを心から祈っています。」



東京の高校生は、私服で参加している生徒もいて、自由な発想を持っていた。「将来は、政治家か弁護士になりたいと考えている。少子化対策にも興味を持っており、どう考えますか。」と質問されたりした。時々、東京に行って違う風にあたることが大事だと思った。

高知への旅 平和と国際連帯の教育分科会に参加して

ロシアによるウクライナ侵攻をどう捉えるか。この分科会を通しての大きなテーマであった。そしてそれに関して例年の分科会以上に活発な議論がなされた。

最初は、高校の「生徒と世界の出会い～国際問題講座より～」という「気候変動」に関するレポートであった。国際会議COPと伝説のスピーチ3つ（セヴァンさん・グレタさん・キャシーさん）のスピーチの動画などを視聴することで地球温暖化の問題に迫る。中でもマーシャル諸島の詩人キャシーさんの「温暖化で海面が上昇し、高波で家に浸水し、森がなくなることに対して、先住民族や母親たちが声をあげている。この母なる地球を破壊させない。」というスピーチが生徒の心に残ったようだ。また、E TV特集中村哲の追悼番組「武器ではなく命の水を」を見て、「これぞ勉強だと思った。この講座のおかげで将来やりたい事が明確になった。」と大学への志望の動機付けになった生徒もいたようだ。「生徒を世界にどう出会わせるか。」本物の大人と生徒をどう出会わせるかが重要だと改めて思った。また、「気候変動は、政治と経済の問題だ。」というレポーターの言葉が印象に残った。会場から「日本の砂浜が減っている。高波が発生するのも台風が大きくなっただけでなく、海水面の上昇があると考えて、そのような視点から調べてみたい。」という発言があった。私たちの問題であることを認識するために重要な視点であると感じた。



2つ目は、小学校の「世界はつながっていて、自分は無力でないと知った」という家庭科での実践レポート。あえて裁縫の基礎ではなく「自分の好きなものをクロスステッチで刺繍すること」に取り組むことで新しい教科家庭科へのモチベーションを保つ。「生まれつき不器用だから、できないんだ。」と泣いている生徒には、個別に指導を。最後には「不器用って直るんだね。」と笑う姿も。「しょっちゅう糸がこんがらがっちゃった。自分では直せなくて先生に持っていくと『人生と同じでやり直しができるから』といつも言われて、失敗してもいいんだなと思った。失敗してあきらめなかったから、完成できた。」と達成感を持つ子が多い。活動に関連付けてさりげない人生哲学を挟み込むのが凄い。冬休みの「この時期にしか作らない・味わわない地域料理・伝統料理を作ろう」という課題を通して、祖父母や家族と関わり合いながらともに料理体験をする。「おばあちゃんの手間をかけた黒豆はすごい。」などの感想も。また、「世界に一つだけのマイバック」製作では、自分で生地を選び、使う用途にあわせて、大きさ、形、持ち手をデザインしてオンリーワンのマイバックに取り組む。「このバックは、2万円でも売れない。」という生徒も。この生徒は休み時間に防災頭巾を直したり、冬休みに捨てる服からクッションを作ったりとミシンを使いこなせるようになったという。「今はなんでもお金を出して買えるけど、道具を使っ

て自分のものを作ると作っている人の気持ちがわかるようになった気がする。」という生徒も。さらには、ミシン技術を伝える会では、6年生が5年生に一对一で伝授する。教員が一斉指導で教えるより、「早く正確に」技術が身についたという。6年生は5年生から羨望のまなざしを受け、自己肯定感が育つ。授業を通して「テストや受験のためじゃない、学ぶ意味がわかった。」「消費行動は投票」「安いバックを見ると、どこの綿を使って、だれが縫っているんだろう。児童労働かな。」など深い学びが感じられた。教師の多様性を認める応答が、生徒にも自然に伝わり、また、社会の課題に対するまなざしがしっかりと育まれている実践であった。



3つめは小学校の「この空から原子爆弾が投下されていたら」というレポート。まずは、視界不良のため原爆の投下を逃れたこと、造兵廠があったことを「知る」ことから始める。6月23日沖縄「慰霊の日」8月6日9日15日の節目の日を「知る」そして、「考える」。「考える」は、国語科「平和のとりでを築く」、道徳科「長崎の鐘」、総合「平和の駅プロジェクト」など教科横断的に取り組んでいた。「平和の駅プロジェクト」は、大学生が企画し、小学生が学ぶというものだ。さらに「実践」ということで、そこで学んだことを全校生徒に広げる活動を行った。6年生が1～4年生の教室に行き、原爆投下、佐々木禎子さんの話などを低学年にもわかるように話し、鶴の折り方を教えながら一緒に折り、平和への願いをそこに書いた。また、「戦争と平和について調べまとめ、学級内で発表し、さらに全校生徒に向け発信した。このような活動の中から「先生、戦争が起きたね。」とウクライナのことを報告に来た生徒がいた。しかし、管理職から「ウクライナのことは扱わないで」と言われたとのこと。会場からは、「国語の教科書から平和教材が減り、「平和のとりでを築く」も巻末にもっていかれた。また、社会科では今までは戦争について調べていた時に、並行して国語科でも扱っていたのに、公民から歴史という流れに変わった。本来は、戦争の悲惨さを伝えてから憲法を学ぶべきだ。」という発言があった。学習指導要領の改訂が目に見えない様々な所で影響を及ぼしているということがわかった。

4つめは、「二人の死と二つの再生～朗読劇とラップ～」という秩父ユネスコ協会のレポート。春の平和祭では、楳山ヒロコさんという広島で1歳の時に被爆し、高校2年生でなくなった方の朗読劇。夏の平和祭は、葛根廟事件の証言をもとに、ラップで表現。どちらも同年代で亡くなったヒロコさんや女の子の事実を知るという高校生の心に届く取り組みがなされていた。このような題材は、大人の側から提案をするが、次は「悪魔の飽食」を読もうと生徒の方から提案があったそうだ。「これじゃあおもしろくないよな」という思いから、生徒の得意を活かして「ラップ」にのせて思いを伝えるという高校生が主体となった取り組みであった。平和について学ぶと、関心のない子や逆に、具合が悪くなってしまいう子もいるが、朗読したり活動に加わったりしてみるとしっかりと受け取ってくれるという言葉が印象に残った。



5つめは、「多文化共生体験型授業～高校生が教える小学校出前授業～マレーシアで学んだ高校生たちのプロジェクト」という高校での実践レポート。外務省主催の JENESYS2018 の一環で高校生 16 名がマレーシア訪問し、現地の高校生と交流したり JICA 視察を行ったりした経験をもとに小学生に出前授業を行うというものだ。海外に行くだけでなく、そこで学んだことを北陸新幹線サミットで発信し、さらに全国の高校生から刺激を受けて、新たなアクションプランを計画したという。出前講座では、「アディバの学びー自分の中の異文化に出会う」では、クイズの答えがAかBか場所を移動して答えることで、体を動かす要素を加えるという工夫がなされていた。ヒジャブ体験とお菓子あてゲームを男女別に行ったことは再考を要すると感じた。「普通の高校生だった彼女たちが国際交流をきっかけに大きく成長していく。」というレポーターの言葉が印象に残った。

6つめのレポートは、「ホロコーストから何を学ぶか」という中学校でのレポート。教科書には、5行程度の文章でしかホロコーストがとりあげられていないが、その歴史を「自分たちのこととして捉え考え、学び、これからの生き方につなげてほしい」という思いからの実践であった。第一次世界大戦の賠償金は日本円で約 200 兆円。さらに 1929 年の世界恐慌で、失業者 600 万人という社会状況の中で、国民の支持を得て選挙によって合法的に政権を獲得したのがヒトラーだと確認したうえで、「死の門」の写真を見せて「これは何か」から始まり、強制連行されるとしたら「何を持っていくか」という発問をする。そこでハンナ・ブレディは「両親の匂いが染みついている寝袋」を持って行ったとの紹介をし、同年代の少女におきた出来事として、生徒たちに想像させていく。最後は、青木進々「アウシュビッツの子どもたち」の一部を紹介し、「ホロコーストの種は誰しもが持っている。大事なはその種を芽生えさせないことだ」という言葉も紹介する。アウシュビッツの罪をおかした人々は、特別な人ではなくみんなどこにでもいる、ふつうの人たちだったのではないかと。自分の心の中にもあるのではないかと「自分の問題」として捉えなおすという学びの意味を追求した実践であった。

これら6つのレポートを通して、過去の歴史を学び、今の生き方にもどうつなげるかという視点の重要性を改めて感じた。歴史の中で、同年代の人々が、どのような状況におかれ何を感じたかを追体験し、想像する。自分だったらどうしただろうかと考えてみる。それは、朗読やラップや出前授業などの表現活動を通じて初めて血肉となる。自分の中に入ってくる。そして、一つの歴史を深く学んだことが、別の歴史の側面を考える時の核となっていく。そのような積み重ねが重要だろう。会場から「知識として学ぶことと感性的に学ぶこと。ドイツはウンテルデン・リンデンに戦争の看板を立て、ポーランド大使館は、ドイツがやったことを展示したり、虐殺された人のモニュメントを作ったりと感性に訴えることを行っている。が、日本は何もやっていない。」という発言があった。身近な地域の加害や被害を目に見える形で残す必要がある。



④ 対話で育つ学び

今回話題となったことの一つに「事実をどう見究めたらよいのか」ということがある。「日本のメディアは統制されているので、海外のメディアから情報をとるようにしている。全国紙、地上波は大本営発表の危険性がある。」「国民の無知が大きい。うそも 100 回つけば本当になる。郵政民営化もアベノミクスも。歴史の中のからくりの部分に気づいたり、マスコミのやっていることにも気づいたりしていくことが大事」「ネットの情報だけに頼らないで、図書館でとっていたが、今は GIGA スクール構想でそうもいかない。『オスプレイは他の飛行機より落ちない』などという間違っただけの情報を信じてしまう。思考力をつけさせることがますます大事になってくるけれど、難しい。」「どうして騙されてしまうのか。日常的な中でも戦争につながる感情がある。正しいより楽しいおもしろいのでとにかくやってみる。正義のためにやらなければならないという『べき論』で動かない。権力に抵抗するために楽しいおもしろいことで動くことが突破口にならないか。広島県立基町高校の高校生のように、被爆体験者の経験を絵に表現し、伝えることで自分のものになっていく。」「だまされない。どう真実を知るか。現地へ行って取材をし、現実を知る。見えるものだけでなく、見えないものも。アメリカが武器を渡すのは何のためか。表面上ではなく誰が何のためにやっているのか見抜く必要がある。」などの発言があった。ここからは私見。現在進行中のロシアによるウクライナ侵攻の出来事を考えるためには、過去の戦争の歴史を念頭におく必要がある。戦争というものが、どのようなものであるか今こそ改めて学ぶ必要がある。

多くの人々は、「お金、もの、消費」のサイクルに巻き込まれてしまっているが、これもプロパガンダのなす業なのだろう。いつの時代も私たちは、見えない大きなものの力によって囚われてしまっている。満蒙開拓の時代に、政府のプロパガンダに踊らされ新天地を求めて移住した人々のように。そこには、貧困という問題が存在している。現在のコロナによる経済状況とそれによる社会不安は、大いに警戒する必要がある。まさしく第二次世界大戦の始まる前の状況に近いのだ。満蒙開拓の時代は、家族全員が食べていけるように何とか解決しようという思いがあったからまだ救いがある。しかし、現代人はただ次なる欲望を満たすために消費行動を続けている。そ

して、ものを手に入れることで自分の存在を確かめ、自由で、個性的で多様性を備えていると思わされてしまっている。そのことに気づく目を作りあげるのが教育の役割であろう。本物の価値あるものを見つけるために、本気で行動する大人を見つけるために様々な出会いを授業や活動の中でつくるのが大人の役割であろう。

TVの報道である大学教授は、「民主主義が正しいと叫べば、非民主主義の国からは反発がおきる。作用に対して反作用が起きる。」という。また、ある教授は「今までの研究で、プーチンは戦争を起こさないだろうと考えていた。しかし、今回このような結果になった。彼の内面にどのような思いがあったのかを研究できていなかった。このことを次の戦争を抑止する方法を考える方向につなげたい。」と述べた。

また、ある識者は、「ロシア国民の8割がプーチンを支持しているが、これは70年前の日本と同じだ。ロシア人自身が目をさますよう、様々な立場の日本人がそれぞれの立場から、ロシアの国民にどう発信し、どう伝えていくかが問われている。いくつかの大国が力を握るのではなく、全員参加型の世界に転換するために日本の果たす役割を考えていく必要がある。アジアの一国であり、敗戦国であり、唯一の被爆国である日本が新しい秩序を作りあげるためにどう発信するかが問われている。」と言う。いずれにせよ複合的な視点から見ていかなければならない問題だろう。

高知 よさこい・薫焼き

高知では、路面電車が走っていた。事前にプラタモリを読んで高知の地形や坂本龍馬に関しては学んでいたが、路面電車は行ってみて初めて知った。片側二車線そして、路面電車の線路。歩いてはいけなところを歩くはめになってしまった。路面電車が来たらひかれてしまう。ときどきしながら慌てて駅へ。思いがけない旅の一コマ。 夜はカツオの薫焼きのお店へ。普段魚はあまり好んで食べない私であったが、カツオの薫焼きは本当においしかった。何より魚が新鮮。薫焼きの実演を見に店の一階まで降りて、写真撮影までさせてもらった。食べるだけではつまらない。店のお兄さんとの会話も楽しい。薫でなくてはならないそう。夜は、ホテルの温泉へ。ほとんど貸し切り状態でのんびりと。風呂上りには、「よさこい」のビデオ鑑賞。「土佐の高知のはりまや橋でぼうさんかんざし買うを見たよさこいよさこい」単純なせりふだがおもしろい。「よさこい」は何を意味するのか。「夜来い」だとかという説が。だが、なぜ「夜来い」のなか。ぼうさんが恋人に伝えた言葉なのか、ぼうさんがかんざしを渡すところを見に来いということなのか。様々な解釈を考えた。いまだに謎だ。「よさこい祭り」の時期には全国から踊り手や観光客が集まるようで、おもしろい催しだなあと考えた。地区ごとに衣装や踊りも違って、子どもから大人まで自分の地区への思いがこの毎年の祭りを通して育まれるのだろうなと思った。おまけに全国の人たちとの交流もあっていい地域おこしだと思った。何より踊ることは楽しい。楽しいことを皆でやるからさらに楽しくなる。健康にもいいだろう。一緒に踊りたくなった。



幡多ゼミナールへの旅

2011年韓国平和への旅、2013年14年「核被災に向き合う青年学生の集い」に参加してからぜひ一度訪問したいと願っていた幡多ゼミナールへの訪問が実現した。幡多ゼミナールは理想郷のようなところだった。前には田んぼが広がり、その先には小高い山がある。裏には庭やバーベキュー施設があり、その先は小高い山だ。そしてそこに宿毛市いなかぐらし体験機能向上事業「泊り屋工房」があった。中には、暖炉そして自炊のできるかまどや五右衛門風呂。まさに田舎暮らし。こんな場所に寝泊まりし、皆でわいわいやったら楽しいだろうなと

思った。幡多ゼミナール館は2階建てで、2階が学習室になっている。テーブルは卓球台で、卓球を楽しむこともできる。周りには活動の報告や写真が飾られていた。そこで山下さん幡多ゼミナールの卒業生の橋崎さん、近藤さん、津野さんそして教員だった東さんたちから話を伺うことができた。「学ぶことの楽しさを伝えたい。子どもたちと体験をしたい。過去のことだけでなく今につなげたい。」という山下さんの理念を改めて確認できた。また「ビキニ事件の時9才であったが、明るくてやさしかった青年が被災して4、5年後に異変が起き、甲状腺がやられて声がでなくなりこぶができた。のちに高校生とともに調査を始めて原因がわかった。腹が立ち、絶対許さない。」と思ったという原点も。幡多ゼミナールは「平和だけにしばらない。自由で、学校では出会えない人と会える。自然のすばらしさを知る。五感を高める。楽しいからやる。今の教員の状況は厳しい。忙しすぎる。教師は本当は余裕が必要な仕事。ゆとりが大事。子どもより先に感動する。今の状況に危機感を持たなければ。」とも。

箱崎さんは「ため口で話ができた。言いたいことを言えるようになる。自主的なサークルで他県の高校生と知り合えるのが楽しい。ゼミの活動をしに学校へ行った。」近藤さんは「教員との関係の近さと言いたい放題言うのに驚いた。段々慣れていった。学校は厳しかった。また、まじめなことが馬鹿にされる風潮があった。いろんな所に旅ができるのが楽しかった。沖縄へ行ったときに皆が羽目を外したら、りっちゃんが大泣きした。何のために沖縄に来たんだろうと自由に話をする中で、皆で泣いたこともあった。」「ゼミで視野が広がった。高校生が動くことで大人が動いてくれる。社会への思いを言えること。いうことで少し変わっていくことを知った。中学時代はもんもんとしていたが、霧が晴れた感じだった。」と。

津野さんは「友人から誘われて新年会の行事の時に参加。泊りで騒いで40人ぐらいいた。土日に予定が入るが、強制もされない。自主的に参加。その頃は顧問が10人ぐらいいた。同じ内容ばかりやっていて意味があるのかと葛藤して話し合ったこともあった。卒業生たちも来ることも。」と。最後に山下さんが「ここは地域探究の場。地域を見る力、足元を見直す力をつける。地域を見る目を持つことがスタート地点。高校生でなければできないこと。高校生になら話したいと言って話してくれたことを熱心にメモをとり、私が聞いたから伝えたいと思う。同じ人から聞いたのに違う見方をする人がいるのを知ることができる。立場の弱い人や地域の人に目を向ける目線を持つ。これが日本の教育にはできていない。」と。最後に皆で集合写真を撮影。いつかまた泊りに行って、皆でわいわいやりたい。

四万十川 カニと沈下橋と桃源郷

中村に宿泊の朝、四万十川の赤鉄橋を渡り対岸の土手に降りた。がさがさっと動くものがあり、野ねずみかなあと思った。河原に降りてみるとそこにはたくさんの蟹たちがいた。黒くて岩の色とほぼ同じなので最初は全く気が付かなかった。が、よく見るとうようよという。心が躍った。「よーし。つかまえるぞ。」と挑戦するのだが相手はすばしっこくて、石の下にもぐってしまうのでそう簡単にはいかない。それでも少し小さめな蟹をなんとか捕まえることができた。川面では、ときどき魚がはねている。ああこれが、四万十川かと思った。帰ろうかなと土手にあがったら、テトラポットの穴の中に、赤いカニがいた。

結構大きいカニだ。しかも逃げ場がない。チャンスだと思った。それでも挟まれたら痛そうなので、そこらにあった棒を使って、遊んでみた。カニは案の定くっついた。何とか記念写真をとる思い、カニのついた棒を足で抑えて、両手を自由にして撮影した。嬉しかった。生き物を相手にすると童心にかえったようになる。というか、子供時代に生き物と思う存分遊ぶことができなかった後悔を取り戻したくなる。しばらくカニと遊び、はるばる四万十に来てよかったと思った。

この日は、焼津平和賞の時に来焼した議員さんのお宅を訪問するということだった。途中、沈下橋をいくつか見ながらいった。沈下橋とはよくいったものだ。人間の知恵と文化がつまっている。佐田沈下橋、



勝間沈下橋へ寄った。勝間沈下橋には「飛び込むな！川の底には渦がある。最深部約 18 メートルとあった。」穏やかそうに見えて自然はあなどれない。

そして、到着したところは山の中。自宅と聞いていたので普通の家を想像していた。が、着いたところは、豚舎を改造したところ。しかもすべて手作りで少しずつ完成させているというのだ。中には近所の子どもたちも集まり、走り回っていた。驚いた。毛皮の説明も受けた。道路でひかれた鹿やタヌキの皮をはいで、毛皮にしている友達がいるとのこと。繰り返し、繰り返しなでなでしてしまった。なんという暮らし。裏には二ワトリ小屋が。自給自足の生活。そのうち、ギターを持ち出して、作詞作曲の歌を披露してくれた。さらには河原に行こうということになって、子どもたちは軽トラの荷台で。大人はゆるい下り坂を歩いた。そこにはゆるやかな川が広がっていた。家から歩いてすぐに川があるとは。子どもたちはすぐに水遊びを始めた。そこで、再びギターをもって歌の披露。小雨の降る中、芳醇なひと時を楽しんだ。水や川に感謝するような歌だったように思う。まさに桃源郷。こんなふうに暮らしている人たちもいるのかと衝撃を受けた。旅の最後がこんな一日になろうとは。



旅を終えて

世界を変えるのは、武力ではなく対話力である。そして、ひとりひとりの行動である。田中優子さんの講演にあったように「多様性を包摂」する社会を目指し、ひとりひとりが地球市民になることで平和な世界へと近づいていきたい。そして、粹にとらわれない自由な心性を持ち続けたい。





全国教育のつどいに併せて「高知へ行こう」と決めた理由は2つあります。1つは宿毛にある幡多ゼミ館に行き、山下さんはじめ、幡多ゼミの懐かしい人たちに会いたいということ、2つ目は教育のつどい「教育フォーラムD 平和な未来を子どもたちとともに」でウクライナ問題についてどのように話し合われるかをみたいというものです。

岡村啓佐（けいすけ）さん（写真家・平和資料館「草の家」の副館長）

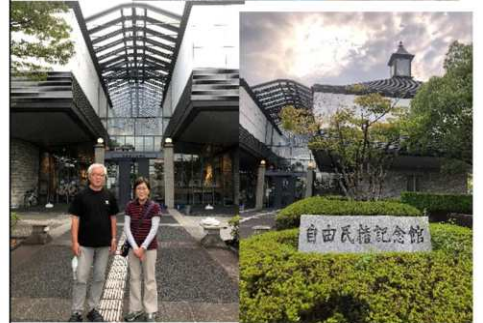
岡村さんは、ビキニ水爆実験で被ばくした漁師や遺族を撮影、過酷な体験を記し日英語併記の写真集『NO NUKES ビキニの海は忘れない』を自費出版しました。私は静岡の見崎進さん・池田正穂さんの撮影の時、同行しました。岡村さんは高知市にある平和資料館「草の家」の副館長です。2018年に高知で開かれた日本母親大会の時、静岡の参加者が「草の家」を訪問し、岡村さんから詳しい説明を受け皆さん、とても感銘を受けました。岡村さんは「ビキニデー集会 in 高知」の事務局長も務めました。静岡のビキニデーとは規模も中味も上で、どのようにしてあのようなビキニデー集会を成功させたのか知りたかったです。

今回は、教育フォーラムDに参加する前にお茶しながら話を聞きました。
①従来のやり方にとらわれず、新しいやり方を任せてくれた。②みんなで協力し合った。③高知大の学生や若い先生たちにも参加してもらった。（この中に、今日フォーラムで報告する若い小学校の中村元紀先生がいたんです。「採用1年目はコロナ禍による一斉休校から始まり、プリント作りばかりで面白くなく仕事もうまくいかず教員をやめたいと思っていた。地域の平和学習会で出会った大人たちに励まされ、学びながら「失敗してもいいんだ」「子どもたちと一緒に平和をつかみ直した。今は、面白くてしょうがない。」と報告。教師として再出発する姿は感動的でした。

岡村さんから若い世代に継承していくことに高知は取り組み、成果を上げているという貴重なお話を伺いました。これぞ高知のチカラでしょうか！
「自由は土佐の山間から」高知は「自由民権運動」発祥の地。立派な「自由民権会館」と展示室があります。このような名前の建物があるだけでもスゴイと思うけど、岡村さんは「ここでも加害の歴史は展示しない。だから加害の歴史は「草の家」でやるしかない。」と言います。



「草の家」にて
岡村さんと



村井真菜さん（幡多ゼミ OG 四万十町議員）

「教育フォーラムD」会場ステージにいるシンポジストの女性はどこかで見た気がする。焼津平和賞授賞式ではなかったかなと思い、岡村さんに聞いてもらおうとやっぱりそうでした。イヤー、驚きました！焼津平和賞授賞式に山下正寿さん・森康行さんと一緒に参加した幡多ゼミOGだったのです。彼女は焼津のステージで歌を歌っていいかと山下さんにきいたとか。幡多ゼミ生の中でもユニークだったそうです。

真菜さんは「幡多ゼミ生として地域の歴史を掘り起こしたり、日韓交流をすることで、自分たちは歴史の上に生きていることを実感し、自分の人生は自分で作るという意識が芽生えた。『草の家』でのボランティアで韓国の人と知り合い、いろいろ学んだ。多感な時期にどんな大人に出会えるかが大切。」と報告しました。

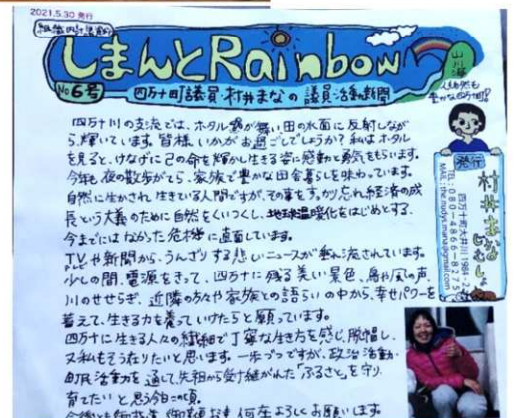
フォーラム終了後、すぐに彼女の所に行き「静岡から来ました。明日会う予定の漁師さんに会えなくなってしまうので、もし都合つけば四万十町に行かせてもらえますか？」と頼むと「いいですよ！」そして、四万十での感動体験となりました。



焼津平和賞



自由民権会館で真菜さんと



四万十町議員・真菜さんの議会活動の新聞

ウクライナ問題の「真実」を知りたくて

粕谷たか子

全国教育のつどいに併せて「高知へ行こう」と決めた理由の1つは「教育フォーラム D 平和な未来を子どもたちとともに」でウクライナ問題もテーマになっているので、どのように話し合われるかをみたいというものです。特に、東京高校生平和ゼミナールで活動していた田原ちひろさんが発言するというので、彼女にぜひ聞きたいことがあったのです。高校生平和ゼミナールは、ロシアのウクライナ侵攻について、3月21日にロシア大使館に抗議、ウクライナ大使館に激励に行きました。

田原さんには以下のことを聞きたいと思っていました。「ウクライナ問題について、3月21日にロシア大使館への抗議行動をして以降、情勢がかなり変わってきたと思います。アメリカが前面に出てきて、大量の武器と多額の資金をウクライナに供与して、ロシアとアメリカの代理戦争のようになっている。また NATO 軍がウクライナ兵に武器使用法訓練や市街戦訓練を行っている。多数のウクライナ兵と国民が犠牲になっている。ロシアだけを批判し抗議して済むものではないのではないかと考えますが、高校生・若者のみなさんは、このような状況について話しあっていますか？どのような意見が出ていますか？」

フォーラムの途中、東京会場と高知会場をつなぐ音声に不具合が生じたため、田原ちひろさんへの質問が伝わらずに、回答を得ることができなくて、とても残念でした。重要な問題なので、事後でも田原さんに質問を伝え、回答をもらえないかと全教本部に頼みましたが叶いませんでした。

ウクライナ問題については、ロシア・プーチン批判一辺倒ではない、メディアとは異なる視点からの論評が、安齋育郎さん（立命館大学名誉教授）から沢山送られてきます。安齋さんは「ブチャの虐殺」や「マリウポリ劇場爆撃」についてはフェイクであると数々の証拠をあげています。私は「真実を知りたい」の一心で、いろいろな人の意見を聞いてきました。教育の場では「真実」を教える、「真実」がよく分からない状況ならば、メディアリテラシーを教育する、原点は「いのちをまもる」「国際紛争を解決するのに武力は行使しない」という憲法9条です。9条を掲げるだけでなく、具体的に行動するということを子どもたちとしっかり確認してほしいのです。

教育フォーラムでは安齋育郎さんの論評も参考にしてもらいたいと思い、安齋さんに「教育のつどい」用にあらかじめ書いてもらい、全教本部・教文担当に送り、フォーラムのコーディネーターに渡してもらうように依頼しました。しかし打ち合わせは終了したので、フォーラム終了後に手渡しするように言われました。それで30部ほど印刷していき、終了後にコーディネーター、発言者、スタッフに渡しました。私の連絡先も付けましたが、何も入ってきませんでした。

<安齋育郎さん「ウクライナ戦争を見る視点」より抜粋>

平和研究者としての私は、「ロシア・バッシング」にもっぱら傾いている日本の市民運動のあり方に、非常に大きな危機感を抱いています。ロシアがこの戦争(ロシア流に言えば「特殊軍事作戦」)に乗り出した理由は、2つです。

❶ウクライナの非軍事化と、❷ウクライナの非ナチ化です。

❶の「ウクライナの非軍事化」というのは、ウクライナの NATO 加盟計画を撤回し、NATO によるウクライナへの軍事支援をやめることです。(略) ❷「ウクライナの非ナチ化」は、2014 年にポロシェンコ政権が成立して以降、ネオナチ(ナチズムの流れをくむ極右民族主義者集団)の民兵部隊がウクライナの正規軍に組み込まれ、東部ウクライナのロシア語話者(生活言語としてロシア語を話す人々)に対し「民族浄化」ともいうべき攻撃を加えてきた深刻な状況に関わっています。2014 年にアメリカが 50 億ドルの巨費を投じて「親口政権打倒・親米傀儡政権づくり」を画策し、その結果誕生したポロシェンコ政権下でドネツクやルハンスクなどのドンバス地方のロシア語話者への民族浄化的暴虐が始まり、すでに 8 年間も同じウクライナ人でありながらロシア語を生活言語とするという理由で抑圧され、攻撃され、恐怖心から逃れられない生活を強いられてきました。(略)

●ウクライナ戦争を招いたもの

こうして見てくると、ウクライナ戦争を誘発した原因は「アメリカによるウクライナの NATO 加盟への勧誘」と、「ウクライナによるロシア語話者への民族浄化的暴虐」にあることは極めて明白で、それらがなければこの戦争は起こらなかったに相違ありません。その意味では、戦争という手段を選んだロシアに対する批判だけでなく、この戦争の原因を作ったアメリカ政府とウクライナ政府の責任もまたしっかり見据えなければなりません。

幡多高校生ゼミナールとは

1983 年設立。「足元から青春と平和を見つめよう」をモットーに、地域の人権問題と現代史を結び付けた調査に取り組んできました。1985年、ビキニ水爆実験の被害は「第五福竜丸だけではなかった！」ことに衝撃を受け、被災漁船員の聞き取り調査を行い隠された事実之光を当ててきました。その活動はドキュメンタリー映画「ビキニの海は忘れない」(1990 年制作。監督・森康行、ナレーション・吉永小百合)に記録されています。久保山愛吉さんの妻・すずさんを訪問して話を聞き、翌年「愛吉すずのばら」を高知に譲りうけ、大切に育ててきました。2011 年、第 2 回焼津平和賞を受賞しました。

幡多ゼミ館は、顧問の山下さん宅の敷地に建てられ、学習・交流・資料展示の場として使われています。



宿毛の海



聞き取り調査をする幡多ゼミ生



清水市長・森康行・山下正寿・村井真菜さん



2019 年、日本母親大会 in 静岡に、ばらの挿し木を持ってきてくれた橋崎さんと授受した岡崎君、感動の再会



1989 年すずさんを訪問した焼津中学生と幡多ゼミ生

すずさんが送った
愛吉すずのばら



紙芝居「ビキニの海は忘れない」



2011 年、焼津平和賞授賞式に参列した村井さんは、今は四万十町の議員です。「教育のつどい」で再会してビックリ！お土産のお茶は岡崎君が作ったもの。



静岡からはエバーグリーンメンバー6人が参加。「幡多ゼミに続け」と、第五福竜丸漁師の聞き取りを始め、以来、韓国・福島・石巻に同行。岡崎君は高校生の時からずっと関わっている。幡多ゼミからは顧問の山下さん東さんと卒業生が参加。3人は「幡多ゼミは本当に楽しかった！！」と弾けた。

高知・宿毛（すくも）にある幡多ゼミ館に行って、お世話になった懐かしい方々に会いたいとずっと願っていました。高知には2018年母親大会で行きましたが、宿毛までは足を延ばせずじまいでした。

「今年2022年8月には、全国教育の集いが高知で開かれる。それに参加しながら宿毛まで行けば、2つの目的が叶う。よし、決めた！行こう。せっかくだからエバーグリーンの仲間を誘おう。」

ということで、決行。行事が重なり、参加者はそれぞれキツキツのスケジュールだったけど、皆、何とかやり繰りしてくれました。幡多ゼミと一番長く交流してきたのは岡崎航平くん。彼にはどうしても行ってほしくて、力を入れて説得。彼は仕事の都合で1泊2日しか参加できなかったけど、貴重な体験をしたと喜んでくれました。

高知から宿毛まではレンタカーで高速道路を飛ばして2時間。幡多ゼミの忙しい人たちが集まってくれて、3時から懇談会をすることになっているので、間に合うかどうか気が気ではありませんでした。宿毛の海が見えた時は「あと少しだ」とほっとしました。

ナビを頼りに走ると白い建物が見えました。「幡多ゼミ館」の看板がついた2階建ての家。「こんな田んぼの中にあるんだ！」が率直な感想です。幡多ゼミナール館は、山下さんが土地を提供し、建設資金1000万円をカンパで集め、幡多ゼミ生のお父さんに大工さんがいたので頼んだのだそうです。1階は宿泊室、2階は資料室、会議や合唱の練習に使ったとのこと。部屋の壁には30年以上の活動を記録した写真がびっしり貼られています。若き日の吉永小百合さんの大きな写真もあります。

庭には、すずさんから送られた愛吉すずのばらが植えられていました。「ばらさん、会いたかったよ！！」ばらの挿し木づくりで使った作業台やバーベキュー道具もあります。壁には「愛吉すずのばら」と木に文字を書いた掲示板があり、私が山下さんに送った写真と新聞記事を貼ってくれてありました。映画や新聞記事で何度も目にしていた場所。このような「集いの場」が幡多ゼミの活動を支えてきたのですね。

広い駐車場で待っていてくれたのは山下正寿さん夫妻はじめ、東さん・橋崎さん・近藤さん・津野さん。彼女たちは、それぞれ用事があって参加できないと山下さんから聞いていたので、姿を見たときは「わぁお、来てくれたんだ！」と大感激です。ずっと会いたいと思っていた人たちです。東さんとは、韓国旅行と福島・東北被災地フィールドワークに一緒に行きました。橋崎さんとは2018年の日本母親大会 in 高知で初めて会い、2019年には静岡での日本母親大会に中学生の娘さんと参加、愛吉すずのばら鉢を持ってきてくれました。近藤さんは山下さんが送ってくれた新聞記事で拝見。彼女は高校生の時焼津にきてすずさんの話を聞き、写真に写っていると知りまたたびっくり。津野さんは、2011年焼津平和賞受賞式後の12月、高校生と一緒にシンポジウムに参加してくれました。会えるのを楽しみにしていました。

幡多ゼミ卒業生や顧問が、大人になっても繋がってこのように参加してくれる力はどこから来るのだろうかとかねがね知りたと思っていました。高校生時代のままに「りっちゃん」「なおちゃん」と呼び合い、にぎやかで解放された彼女たちの話を聞いて分かりました。「幡多ゼミの活動が楽しかった。話を黙って聞いてくれ自由にやらせてくれる大人がいた。信頼できる大人だった。でも自分たちがやっていることは正しいのだろうか？疑問が湧いて夜を徹して話し合った。ワーワー泣きながら話した。」これら一つ一つが自分を形成していき、今の自分と自分の生き方に繋がっている。学校の先生・民主商工会の事務局長・医療生協職員と、幡多ゼミの活動とつながる仕事についていることも、現在も山下さんたちと強く結ばれている大きな理由でしょう。山下さんたちは後継者を育てることに意識的に取り組んできたのでしょう。静岡も見習いたいものです。

山下さん自身が長年ビキニ事件調査と真相解明、地域づくりに取り組んできたエネルギーは、一体どこから出てくるのだろう不思議に思っています。山下さんは、宿毛の片島という漁港がある町に生まれ育ち、家は駄菓子屋さん。よく若い漁師さんたちが買いにきていたが、元気なお兄さんたちが若くして亡くなっていくのを見ていて「おかしいなあ、なぜだろう」と疑問に思っていた、事実を知るにつれ怒りが湧いてきたと何度も聞きました。ここに原点があるのでしょうか。人への優しさ、悪への怒りが体から湧いてくる人だから「セメントで固めた用水路が赤い子（赤い沢がに）によって穴があけられ崩れる」までコツコツとたたかい続けることができるのでしょうか。そして生徒たちの成長が彼の励みになっているのでしょうか。

私が山下さんと初めて話をしたのは、2011年4月。焼津平和賞に幡多ゼミを推薦したいと、高知に恐る恐る電話を掛けた時です。「他に推薦してくれる人もいますが、たくさんのほうがいからぜひお願いします。」とのこと。それで、焼津市に推薦文を送りました。

直接会ったのは8月、京都での日本母親大会の昼休み。山下さんがホールを歩いているのを見かけて、走って

行って「静岡から来ました。焼津平和賞受賞おめでとうございます・・・」「僕も静岡の高校生とつながりたいと思っていたところです。よろしくお願いします。」ここから、静岡エバーグリーンと幡多ゼミの交流が始まりました。

その後、韓国旅行、東北大震災被災地巡り、福島での「核被災に向き合う青年学生の集い」にお誘いを受け、エバーグリーンも参加しました。そして「幡多ゼミに続け！」と第五福竜丸元乗組員の聞き取りを始めたのです。

山下正寿さんの功績は語りつくせません。とにかく「すごい」方なんです。下記に「高知県文化賞受賞・事績の概要」と推薦理由を引用して紹介します。

私が感じる「すごさ」は、私が「〇〇だといいんだけどなあ・・・」とつぶやいた願い事を実現させてくれる方なんです。それは、山下さんが「ひとを繋げる魔法の力」を持っているからだと思っています。

「2018年の日本母親大会 in 高知で、高校生の時に焼津に来た幡多ゼミ生に会えるといいなあ・・・」

「そのとき、愛吉すずのばらの挿し木をもらえるといいなあ・・・」

「夏に宿毛に行くので、橋崎さんや近藤さんに会えないかなあ・・・」

と、つぶやきメールを送ると、実現してしまうんです。そこにいろんな人が現れるのです。幡多ゼミ卒業生がお母さんになっていて、中学生や高校生になった子供さんと一緒に母親大会に来た人が2組います。

愛吉すずのばらの挿し木を作ってくれたのは老夫婦。おばあちゃんが毎朝水かけをしてくれたのだそうです。このようなことが実現するのは山下さん一人の力ではありませんね。山下さんが頼むとすぐに動いてくれる人たちがいっぱいいるのです。これぞ、山下さんと幡多ゼミの底力です。

山下さんの功績は、「高知県文化賞受賞・事績の概要」と推薦理由を引用して紹介します。

山下正寿さん高知県文化賞受賞 事績の概要

氏は太平洋のビキニ環礁付近で起きたアメリカによる水爆実験の問題をテーマに、「幡多高校生ゼミナール」の顧問会長として、高校生たちによる国内外での被災者調査活動を指導した。その活動は書籍、映画化され、海外でも日本を代表する作品として上映されたほか（＊ライブチヒ国際映画祭で日本代表作品として上映）、様々な賞を受賞するなど国内外で評価されている。（＊「焼津平和賞」もその一つ）また自身も著書「核の海の証言ービキニ事件は終わらないー」を出版し、高知県出版文化賞を受賞した。

さらに、廃校を再利用した自然体験学習の拠点となる四万十楽舎を設立し、理事を務めるなど、地域に寄り添った活動を行い、地域が発展するために尽力した。

以上のように教育・地域現代史研究を通じた多年にわたる氏の活動が、本県の文化振興に寄与している功績は大きい。

・・・・・・上記には含まれていませんが、推薦者は以下の推薦理由も上げています。・・・・・・

推薦理由 2：在日朝鮮人の歴史掘り起こしと交流

地域の現代史掘り起こしの中で、1990 年から、戦時中苦しい労働に従事させられながらも、地域住民と友好を深めた在日朝鮮人の実態を調査し、その取り組みは「渡り川」という本と映画に結実しました。この映画は、韓国でも広く上映され、日韓文化交流にも大きく貢献してきました。幡多ゼミナールの高校生は、韓国を訪問し、現地の高校生と 1993 年より 27 年間に 15 回の交流を深めています。2009 年には、日韓高校生の呼びかけで、「津賀ダム平和記念碑」を建立。日韓関係が厳しい中でもこの交流が、一度も中断されずに続いているのは、「同じアジアの青年として、違いを尊重し、討論を重ね、友情を深めてきたから」と考えられます。

推薦理由 3：東日本大震災・原発事故後の高校生との交流

東日本大震災・原発事故後の福島の教師や高校生と、相互訪問などの友好と交流を深める取り組みも行っています。「東日本大震災に学ぶ」という出版物にその成果をまとめるとともに、『種まきうさぎ』一フクシマに向き合う青春ー」という 3 本目の映画をプロデュースしました。高知県でも近い将来予想される地震津波等自然災害、その被害を乗り越えようとする若者たちを支援する取り組みです。（＊静岡エバーグリーンも参加しました）

支援センターたより No.13

2022 年 9 月 13 日

発行:太平洋核被災支援センター

<http://bikini-kakuhisai.jet55.com>

事務局 宿毛市山奈町芳奈2779-2

山下正寿 Tel・Fax 0880-66-1763

<masatosi.sky@orange.zero.jp>

彼岸花が咲き始めましたが、厳しい残暑です。皆さま、何よりも健康第一、ご自愛ください。

さて、8月22、23日、静岡エバーグリーンの皆さんと幡多ゼミ顧問・OGとの交流が実現し、8月28日には沖の島探求セミナーを実施しました。

ビキニ被ばく船員訴訟は、7月26日東京地裁で第1回口頭弁論が行われ、9月2日高知地裁では第2回口頭弁論が開かれました。裁判支援のクラウドファンディングを9月1日からお願いしています。

新型コロナ感染拡大のなか、計画変更を余儀なくされるイベントもありましたが、感染対策を練りながらできる範囲で実施しました。



ゼミ館2階での交流

1. 静岡エバーグリーンの皆さんと幡多ゼミとの交流

8月21日(日)、静岡の粕谷さんはじめエバーグリーンの一行が幡多ゼミナール館を訪れ、山下さんやゼミ顧問、ゼミOGとの交流を行いました。粕谷さん、森さん、岡崎さん、高島さん、山口さん、橋本さんの6人です。静岡の皆さんは高知市で開催された「教育のつどい」に参加、さらに足を延ばして宿毛市を訪れてくれました。静岡の皆さんと山下さん・幡多ゼミは、共に韓国、福島、石巻を訪問、合同調査や交流を進めてきました。2019年8月には、「愛吉・すずのバラ」を高知から静岡へ里帰りさせた経過もあって今回の交流が実現したものです。



1988年すずさんを訪問した焼津中学生と幡多ゼミ生

幡多ゼミの参加者は、OGが近藤さん、橋崎さん、津野さんの3人、顧問が山下さんと東さんです。

OGの近藤理香さんは、1988年高校2年生の時、高知ゼミの仲間と焼津・久保山すずさんのお宅を訪問、庭に咲くバラの側ですずさんの証言を聞かせてもらい、翌年、久保山愛吉さんとすずさんが大切に育てたバラを幡多ゼミがもらうきっかけを作りました。特別支援学校の養護教員です。

橋崎律子さんは、近藤さんと共にゼミ館で「愛吉・すずのバラ」を株分けし、そのバラを3年前に静岡の粕谷さんに届け里帰りさせたOGで、今、中村民主商工会の事務局長をしています。

津野奈緒さんは、2011年12月、山下さんの焼津平和賞記念講演に同行、シンポジウムでパネラーを務めました。日韓高校生交流の中心として活動、現在、四万十市で医療生協地域交流センターの職員としてビキニ写真展を実施するなど活躍しています。

静岡の皆さんは、ゼミ館周囲の「愛吉・すずのバラ」や住吉丸の展示、BBQ場、展示写真などを見学、その後、質問に答える形で意見交換が行われました。

高校生のビキニ被災調査の始まりから、大人が被災漁船員救済のためビキニ被ばく船員訴訟を闘うようになったこと。日韓交流から韓国高校生と地元の人たちと共に、津賀ダム平和祈念碑を建立したこと。今は高知探求ゼミナールにとりくんでいること等々です。

特徴的なやりとりを紹介します。

問 ゼミ生の勧誘と活動を長続きさせるには？

山下 映画「ビキニの海は忘れない」と吉永小百合さんのナレーションの効果が大きかった。高校入試の面接で、受験動機を「幡多ゼミで活動したい」という受験生が多く現れた。また、中学で不登校やいじめられた生徒もいたが、ここでは何でも言える、素顔の自分を出していいと分ると見る見る変わっていった。ゼミの仲間や地域の人たちに見守られる中で、自分を見つめ直して成長した。

教師こそ余裕が必要な仕事、自由や感動が大事。教師が自由や感動を伝えねば！

橋崎 ゼミでは、ため口で話していることにビックリした。自主的なサークルに魅かれた。ゼミが無かったら不登校になっていたかも。

近藤 言いたい放題言ってることに衝撃を受けた。高校では真面目なことが馬鹿にされる雰囲気だったが、ここは違っていた。平和の旅が魅力だったが、羽目を外しすぎると、ゼミ生の中から「これでいいの」「何のために来たの」と泣きながら提起。それを契機に、もう一度活動や自分を見つめ直した。

津野 他校の高校生と交流できたことも魅力だった。自主的に活動することを大切に、強制しない。学校の勉強より楽しかった。



左手前は「愛吉・すずのバラ」、右奥が住吉丸の説明ボード

問 高校生が活動することの意味は？

山下 高校生の時が大事。自分の足もと（地域）は生活の場、そこを見つめることが大切。それが学習の出発点。ビキニ被災者も高校生には話しておこうという気になる。第5福竜丸だけでなく、その他の人たち（漁員）の思い、生活を掘り下げることが大切。ゼミ生は自分が聞いた真実を他の人に伝えねばと表現活動にとりくんだ。



村井眞菜さん夫婦



四万十川河原で歌う

翌日、静岡の皆さんは四万十川沿いに四万十町へ移動、ゼミOGの村井眞菜さんと交流しました。村井さんは、2011年幡多ゼミが焼津平和賞を受賞、その受賞式に山下さんと参加した時、初めて粕谷さんと出会いました。8月21日「教育のつどいに」に村井さんはシンポジストとして参加、その時偶然にも粕谷さんと再会し、その場で交流を約束したものです。

豚舎を改造した村井さんの家では昔話に花が咲きました。家のすぐ下の四万十川河原に降りて、村井さんはギターを弾き自作の歌を静岡の皆さんと歌いました。村井さんは「短時間でしたが、すごく中身の濃い交流になりました。このつながりを今後も続けていきたい」と話しています。

粕谷さんは、OGの「3人は『幡多ゼミは本当に楽しかった！！』と弾けた」と書いています。「卒業後もOBとして新年会やイベントで交流、現役のゼミ生や顧問の先生とも何らかの繋がりがある、ことは素晴らしい」と仰ってくれました。

（この記事は、粕谷さん、山口さんの文章をもとに、再構成しました。写真は全てお二人の提供です）



大堂海岸の絶景に圧倒される

2. 爽快な大堂クルージング…沖の島探求セミナー

8月28日（日）、沖の島探求セミナーの企画でクルージングを実施しました。柏島から大堂海岸へ、そこ

発行:太平洋核被災支援センター
<http://bikini-kakuhisai.jet55.com>

事務局 宿毛市山奈町芳奈2779-2 山下正寿
<masatosi.sky@orange.zero.jp>

1. ビキニ被ばく船員訴訟支援募金(CF)

ご協力ありがとうございました

目標 500 万を超え、549 万 5 千円に

9 月 1 日より 500 万円の目標でスタートしたクラウドファンディング (CF) は 11 月末に 549 万 5 千円のご支援をいただいて終了しました。支援者は 303 名に代理支援の方々を含めると 500 名を越えます。READYFOR のユーザーのご支援も多く、「ビキニ事件はまだ終わっていない」未解決事件であること、そして、二つの裁判の内容を『クラファン NEWS』で 10 号まで発行し、お伝えできました。

CF 最終日の最後に支援していただいた広島の方のメッセージです。「昨年、76 年を経てやっと認められた広島黒い雨被爆者同様に、被ばく船員の皆さんの被害も正しく認識され救済されるべきです。人類が核を用いて同じ過ちを繰り返しそうになっている今、この裁判で正当な判決を得ることは世界の核利用の在り方を正すきっかけにもつながると考えています。奔走している気持ちで応援しています！」

裁判支援「継続寄付」準備へ

ビキニ被ばく船員訴訟の被告は、国と全国けんぽ協会であり、裁判は長丁場となります。

今後、支援する会はこの度の CF でご支援いただいた全国の支援者の皆さんに、引き続き裁判の支援をお願いするために、「継続寄付」支援のマンスリーサポーターの募集を、2023 年 1 月 1 日よりスタートしました。

暮らしは驚異的な物価高騰で厳しさを増してきていますが、ビキニ被ばく船員訴訟は、高知の原告だけにとどまらず、全国の被ばく船員の救済にもつながる裁判です。どうか、ご理解いただき引き続きご支援をよろしくお願いします。

ビキニ被ばく 継続寄付 レディーフォー

で検索下さい。(この記事は「クラファン NEWS No.10」から抜粋したものです)

2. 2022 年末支援

2022 年末、原告・遺族の方々への年末支援を実施しました。年末支援は 2019 年に始まり今年で 4 年目になります。高齢で闘病生活を強いられている元被災船員の方や夫や父親を亡くし厳しい生活を乗り越えている遺族に、少しでも励ましの気持ちを伝えたいと続けているものです。同梱の水晶文旦は黒潮町の徳広恵也さんのご厚意でいただいたものです。



梱包する支援センター事務局員

配送担当の諏訪から次のように報告がありました。「年末支援で、原告、遺族の方 34 名の方に届けました。被災船員の方は 12 名一昨年より 2 名少なくなり年々原告の方が減ってきています。今回はお米やひがしやま、味噌汁、水晶文旦などの詰め合わせに『クラファン NEWS10 号』を同封し全国から支援が寄せられていることをお伝えしました。宿毛大月の方には手渡し、他は郵送、そのため、ゆっくりお話が聞けなかったのが残念でした。」

後日、太平洋核被災支援センター・事務局長の山下正寿には原告・遺族の方々からお礼の電話が届いています。兵庫在住の Y さんは、自分たちのことを忘れず憶えてくれることが有難いと語り、また、奥さんはお米やひがしやま、文旦に故郷の香りがする、とても懐かしくうれしいと感謝して下さいました。又、遺族の方からは、父は亡くなったのにありがたいと涙する人や裁判への質問をしてくれた方もいます。

原告・遺族の方々は支援への感謝ばかりか、なつかしい故郷との繋がりを感じることがありがたいと語ったことが印象的でした。

3. 全退教四国ブロック交流集会 11/17

2022 年 11 月 17 日に 3 年ぶりの四国ブロック交流集会（退職教職員協議会）が四万十市で開催され、山下正寿と幡多ゼミ OG が講演しました。



右端が橋崎さん、その左が津野さん（写真提供は橋元氏）

講演の様子と感想を助村が報告してくれました。
「私は会員ではないのですが、山下正寿さんが講師を務めるというので、太平洋核被災支援センター・事務局員の一人として参加しました。演題は「幡多地域の学びのネットワーク」です。山下先生のライフワークとも言える核被災問題。その出会いをもたらした幡多高校生セミナー、その幡多ゼミからの流れで幡多地域の学びを高校生以外にも広げて行きたいという山下先生の願いが込められた演題になっていました。まず、山下先生が VTR「日本TV今日の出来事『友情づくり』」を使って幡多ゼミの活動と学びを説明、OG の橋崎さんと津野さんが当時の活動を振り返りながら生き生きと語りました。

長い時間をかけて一つのことを追求する。諦めずに続けていく。そのことが沢山の人の心を捉えるのだなあと感じました。また会場には四国内から沢山の皆さんが集まり、徳島からは 93 歳と 83 歳の会員が参加していてそのお元気に励まされました。私は普段活動らしきことができていませんが、今回の集会に参加して、これからは太平洋核被災支援センターの活動を頑張っていこうと思いました。」

次いで、幡多ゼミ OG の橋崎さんと津野さんの発言内容（抜粋）を紹介します。

今につながるゼミ活動

OG 橋崎律子（中村民主商工会事務局長）

私は、幡多ゼミの「自主的なサークル」「他の高校との交流がある」というところに魅力を感じ、高校 2 年生から幡多ゼミの活動に参加するようになりました。その頃は、映画の撮影やビキニ調査、平和の旅、合唱構成詩などの活動をしていました。先生と生徒が友達みたいに、対等に話をしている姿が新鮮で、自分の思ったことを気兼ねなく言え、それと同じ高校生、先生たちが受け止めてくれたので、安心したし、楽しかったです。

ゼミの活動を始めてからは、わりと積極的に意見を言うようになり、生徒会長に立候補し、生徒会長を務めました。学校には、ゼミの活動をしにいくようなものでした。いろんな全国集会にも参加して、友達もできて、充実した高校生活を過ごせました。勉強も、特に社会の勉強が、これはどういうことか？など、考えるようになりました。例えば、ゼミの活動の中で知った、ビキニ環礁などでの核実験による被災というのは、“戦争の準備の段階でも、戦争にまつわる被害がでる”ということに気づき、ハッとしたことを、今でも覚えています。

ビキニ調査では、上佐清水市にいったとき、住吉丸を見学しました。「理化学研究所」の先生が来られていて、ガイガーカウンターが「ガガガッ」と、音を立て、みんなで放射能だ！と話したこともありました。沖縄の平和の旅では、上岡先生があらかじめ、「ビキニ水爆実験のときのご雲をみたという漁船員の方に遭遇するのは、なかなか難しいかもしれない」ということでしたが、2 人目ぐらいで、「見たよ」というおんちゃんに当たったので、とても、びっくりしたことを覚えています。ゼミ活動の結果、社会について広く学びたいと思うようになり、大学は、社会学を学びたいと、愛媛大学法学部夜間主コースで社会学を専攻し、学びました。

今、仕事は、中村民主商工会の事務局長をしています。民商とは、商工業者の集まりで、中小業者の地位向上を目指して運動をしています。私と一緒に働いている山本さだおさんから、近所にビキニ水爆実験のとき、マグロ船に乗っていた浪岡さんという方がいるということを知りました。山下先生は浪岡さんのことを知っていて、除本さんを山下先生に紹介したのが、浪岡さんだったそうです。それで浪岡さんに、ビキニ被災当時の漁船の様子などを、聞き取りをしたことでした。

ちょうどその頃、2017 年 7 月の国連で、核兵器禁止条約が採択され、その第 6 条に、戦争行為だけでなく、準備や核実験による被害の救済も含まれるということが、決議されました。中村民商も加盟する全商連というところが発行している商工新聞の記者が、私が幡多ゼミをしていたことを知っていて、記

事を書くように頼まれました。私は浪岡さんのことを記事にまとめました。掲載された記事を見て浪岡さんも奥さんも、喜んでくれました。そして、その2週間後、浪岡さんは亡くなりました。「浪岡さんには、歯を提供してくれた被ばく者を紹介してくれるなど、いろいろ協力してくれた。最後にこうして（新聞の記事にできて）、浪岡さんのことが形にできてよかった。」と、山下先生がおっしゃっていました。このように、ゼミで得たことは、今の仕事にもつながっています。

「幡多ゼミでの体験は私の大きな財産」

OG 津野奈緒（医療生協事務職員）

○ 私はクラスの子に誘われて「地域探求部」山下先生の部屋に遊びに行くようになり、そこから幡多ゼミへとつながっていきました。四万十町（大正町）の津賀ダム建設に、朝鮮人が連れてこられていた。「強制連行!!」教科書に載っていて授業で教わったことが「え？ここで？」とただただ驚いたのです。それから、毎回参加するようになりました。

○ 私がゼミで色んな活動をさせてもらった中で特に強く残っているのが、2度の韓国への旅です。韓国で従軍慰安婦だったと初めて名乗り出た「金学順さん」との出会いです。私は学順さんを自宅まで迎えに行きました。2 畳ほどにタンスが置かれ、布団一枚敷けるだけの小さな部屋でした。私たちの宿舍まで来ていただいて話をしてくれました。

話始め、学順さんは数分間じっと一点を見つめ当時のことを思い出していました。その間の張り詰めた空気がとても重く感じられ、これから話してくれることの重さが、その沈黙から伝わってきました。私はその時の姿やあの空気感が忘れられません。生い立ちからゆっくりと話はじめ、「17 歳の時・・・」学順さんの目からぼろぼろと涙が溢れだしました。

「馬小屋のような部屋に連れていかれ、服を破かれ・・・」泣きながらも精一杯話してくれました。話し終わると、とても穏やかな顔で優しく微笑んでくれました。この時ほど、ゼミ活動を頑張ろうと思ったことはありません。

○ そして、映像にもありましたが2度目の韓国の旅へOBとして参加させてもらいました。戦後50年、韓国にとっては日本から解放されて50年（光復節）という年で式典が行われ、その中で景福宮（朝鮮王朝の王宮）の前に建てられた朝鮮を統治するための日本の朝鮮総督府を解体するのですが、大きな画面に映し出された尖塔が切り離される瞬間の韓国人々の大歓声。地鳴りのような、大地を揺るがすという言葉聞きますが、まさにそれです。初めての経験でした。韓国人々の喜びや日本に対する恨みもあると思います。それ

が全身に伝わってきたんです。その中で私は何とも言えない複雑な思いで、仲の良かった子と手をつなぎただただ立っていました。従軍慰安婦や強制連行、日本が統治していた時代には私たちが知らないことがもっともっとあったのではないかと、全身で感じた日でした。今でも思い出すと鳥肌が立つほど鮮明に記憶に残りました。

○ もちろん、高校生や大学生との交流といった楽しい思い出もあります。あの頃は、今のようにスーパーで韓国の食品が買えたり、世代問わず韓国のドラマや音楽が大人気になるとは思ってもいませんでした。きっと韓国にはまっている若者の中に、過去の加害事実をどれだけの人知っているのだろうと思ったりします。最初の旅で交流した学生と2度目の旅で再開し再び交流することができました。しかし、宿舍へ向かう地下鉄の中で「兵役にいかないといけない・・・」と、とても寂しそうな顔をしたんです。複雑でした。それもあり、宿舍での最後の夜はみんなで別れを惜しみました。

○ 就職してからはゼミと離れてしまいました。しかし、幡多ゼミでのたくさんの体験、仲間と一緒に実際にその場所に行つて目で見て、生の声を聴き、全身で感じて学ぶことは私にとって大きな財産になったと思います。

現在私は昨年から医療生協で仕事をさせてもらっています。転職を考え、医療生協とはどういうものかも知らずに入りました。ところが、そこでまた山下先生はじめ幡多ゼミとつながったのです。びっくりしました。

最近ではあまり報道されなくなりましたが、ロシアのウクライナ侵攻や、頻繁にある北朝鮮のミサイル発射などによる日本の動きも、これからどうなっていくのか不安です。だからこそ、若い世代が交流を深め一緒に平和について考えていくことが大切だと思います。

アンケートに寄せられた感想を紹介します。

- ・映像と簡易な説明。素晴らしく何よりも分かりやすい教材。多数の映像資料の中から、最も適切なものを選び編集した頑張りによって本当に頭が下がります。
- ・山下先生のお話で、幡多ゼミで活動していた教え子らを通して行われたことで、その活動が生き生きと伝わり、深く感銘を受けた。
- ・若者が学び、成長していく姿に希望が持てた。
- ・幡多ゼミナールの長い歴史に感動を受けました。

4. 議員ウォッチ全国キャラバン 10/30.31

「議員ウォッチプロジェクト」（代表：川崎哲ピース

ボート/ICAN)の学生メンバー、高橋くんと徳田さんが来高しました。当プロジェクトは核兵器廃絶に対する国会議員や地方自治体の姿勢を可視化し、核廃絶を具体的にすすめようとする運動です。2023年4月の統一地方選挙を前に、私たち有権者が議員に影響を与える好機到来と捉え、議員をウォッチしそれを公表、全国47都道府県でアクションを起こすものです。

太平洋核被災支援センターや「ビキニデーin 高知2023」のメンバーと共に行動し、10月30日には核兵器禁止条約締結国会議報告会を開催、31日には県庁に井上副知事を訪問し県の核廃絶への姿勢やビキニ核被災船員らへの支援などについて質問しました。

井上副知事は核廃絶については「目指すべきゴールだ」、ビキニ被災者支援については「国とも連携し、何ができるか考える必要がある」と回答しました。

徳田さんらは核被災者がいる高知から核廃絶を発信していくことが大切と訴え、核廃絶を目指す都市で作る非政府組織「平和首長会議」の活動への協力を求めました。

5. ビキニ被ばく船員訴訟

ビキニ被ばく船員訴訟は、二つの裁判をたたかっています。東京地裁では、全国健康保険協会を被告として、労災申請却下の取消しを求める裁判、高知地裁では、国を被告として、憲法29条に基づいて損失補償を求める裁判です。

(1)12/16 高知地裁で第3回口頭弁論開かる

江川弁護士が日米合意により請求不能になった被ばく船員の米国に対する請求権の準拠法について陳述を行い、2016年国家賠償請求訴訟で提出した証拠の中から被ばくを立証する証拠を提出しました。

次回口頭弁論に向けて、特に因果関係については準備可能な範囲で民法709条の要件該当性について主張立証準備を進めていきます。

第4回口頭弁論は2023年3月24日(金)です

(2)12/27 東京地裁で第2回口頭弁論開かる

内藤弁護士の意見陳述の内容です。

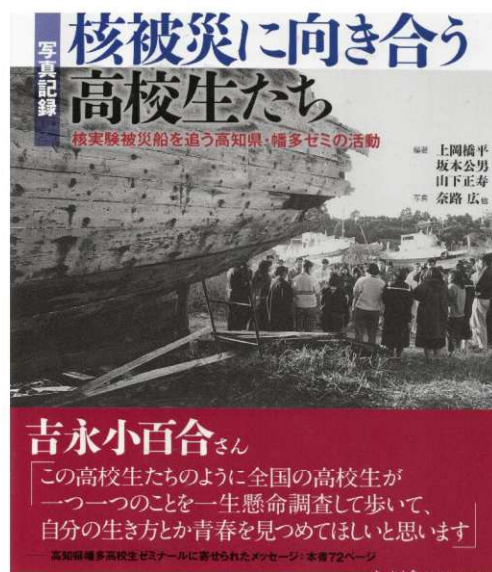
原告側は、水爆によるビキニ被ばくは、放射性物質による被ばくであり、原爆被爆と全く異なる被ばく態様であると指摘。加えて、水爆は3F(核分裂-核融合-核分裂)爆弾で、大量のウランによる核分裂で夥しい放射性物質を生成する「汚い爆弾」であり、

誘導放射化物質を生成する中性子の量が多いことも指摘しています。

さらに、そもそも国際的には初期放射線ではなく、放射性物質による人体影響に関する疫学的評価は存在していないことも指摘しました。

その上で、被告側の線量評価が粗雑で非科学的な基礎データに基づくことや労災認定申請時に提出したビキニ被ばく後の帰港時の血液検査値・その後の最新の科学的知見に基づくリンパ球の血液検査・歯のESR検査など生物学的線量評価に基づく線量との間の大きな乖離の存在など、放射性起因性の根本問題を争点にしていきます。

6. 写真記録「核被災に向き合う高校生たち」の普及にご協力を



写真記録「核被災に向き合う高校生たち」が「すいれん舎」から出版されました。青年の社会参加、地域探求を呼び掛ける教材として全国の高校・大学・地域の図書館などに普及していただけたら幸いです。高知・幡多ゼミナールのビキニ被災船追跡活動や「核被災を学び合う集会」で福島・広島・静岡・東京・セミパラティンスクの青年の報告などが記録されています。

図書館へのすいれん舎からの2割引きはできませんが個人・団体などで購入いただける場合は、著者の紹介と伝えれば、全て著者割引(2割引き)、消費税こみ16,500円のところ13,200円です。すいれん舎から送料無料でお届けします。

なお、この本のチラシは太平洋核被災支援センター事務局か「すいれん舎」に連絡いただけたらお届けします。よろしくお願いいたします。

ビキニ水爆実験

花で記憶を継承

「愛吉・すずのバラ」挿し木で広める

1954年に太平洋・ビキニ環礁付近で米軍が実施した水爆実験による被ばくの記憶を継承しようと、静岡県静岡市清水区に五福電丸の無縁長女、被ばくから半年後に亡くなった久保山愛吉さんが愛したバラを挿し木で広める活動が行われている。世界の核被災者がつながるきっかけ・象徴になれば――。支援者の願いが花開こうとしている。

【松原由佳】

ビキニ水爆実験は54年3月5日に計6回実施された。当時周辺海域では延べ約100の船が作業していた「第五福竜丸」は実験に遭遇し、乗組員23人が被ばく。久保山さんは9月23日に40歳で亡くなった。一方、県内では80年代、高校生らがビキニ水爆実験の聞き取り調査を開始。88年には久保山さんの妻すずさん（故人）の元を訪ね、話を聞いている。その後、高校生は、すずさんが家の庭で長年育てていたバラを分け

てもらい、うち3本が現存している。太平洋核被災支援センター事務局長、山下正寿さん（75）が「バラは目に見える平和の象徴。語り継ぐものとして広めよう」と決意。バラを挿し木して、広めていく取り組みに今年、本格的に着手した。6日には約10人が参加し、宿毛市で約40鉢に挿し木した。参加した四十十市に住む教員、近藤理香さん（48）は高校生の頃、すずさんに会いに行ったメンバーの一人。思いのこもったバラが残っていることを知り、すごく励まされた。広めていきたい」と話した。

2020.6.6

高知県幡多高校
生ゼミナール館
にて北陸
政府登録
ハ
PHONE (0)「愛吉・すずのバラ」
として県内4カ所で育
てら「愛吉・すずのバラ」の前で挿し木を手にする参加者
|| 宿毛市で

山下さんは「ビキニ事件の教材としても賛同する人にバラを配る考えを示した。」

2019.8.24 日本
母親大会 in 静
岡にて、ばらの
挿し木が、高知
から静岡に贈
呈されました

1988.8.4

焼津のすずさん宅にて

近藤さん
すずさん娘さん
橋崎さん

幡多高校生ゼミナールは、2011年第2回焼津平和賞を受賞しました。

第五種電丸ゆかり 幡多ゼミ卒業生ら挿し木

「平和のバラ」残そう



山下正寿さんの自宅に残る「愛吉・すすのバラ」
(写真はいずれも宿毛市山崎町芳泰)

【宿毛】平和のバラ。絶やさない。とキニ環礁の米水機実業(1954年)で被ばくした「第五種電丸」無縁長 久保山愛吉さんゆかりのバラが県内に残っている。30年以上前、静岡県焼津市の自宅の株から挿し木されたもの。樹勢の衰えなどから「花を残そう」とのほど、宿毛市内でさらに挿し木作業が行われた。

(新妻亮太)

バラを育てた久保山さんは被ばく半年後、40歳で亡くなったが、妻のすすさん(故人)が世話を続けていた。関係者の間で「愛吉・すすのバラ」と呼ばれ、平和運動の象徴とされている。

県内漁船の被ばく実態を調査していた同市 幡多ゼミナールの高校生らが88年、久保山さん宅にすすさんを訪ね、翌年

には挿し木の鉢を四つ譲ってもらった。当初は宿毛市で、四万十市と高知市で1株ずつ買取られたが、四万十市の株は枯れてしまった。高知市でも樹勢が弱り始めており、同ゼミナール顧問の山下正寿さん(75)は宿毛市山崎町芳泰に、挿し木を提案した。山下さん宅に6日、卒業生や元顧問ら10人が集

合。同市の教育施設に残る株から切り出した15センチほどの枝、約30本を養液に浸し、数本ずつ鉢に植えた。品種はクイーンエリザベスとみられ、順調に育つのは2カ月ほどで根付くという。

宿毛市

挿し木は参加者がそれぞれ持ち帰った。32年前、高校2年生の久保山さん宅を訪れた遠藤孝人(48)は「四万十市中村」は「思いのこもったバラがいまだに残っている」とに励まされた。大事に育てたい。

自宅の約10坪の1株を世話をしている山下さんら「バラの由来を伝える、それは被ばくの歴史を伝えること。学習教材としても残して、思いのある人に届けたい」。淡々と花を見つめて話していた。



挿し木を行った参加者ら

「愛吉すすのばら」の品種はクイーンエリザベスか。(専門家に見てもらったところ、確かにそうだとのこと) 品種名は、一九五二年に女王となったイギリスのエリザベス女王の戴冠にちなんで命名されました。現在のエリザベス女王を象徴するバラとしては、やや初々しさのある色味ですが、即位当時二六歳のエリザベス女王に捧げられたバラですから、美しいピンク色のバラが選ばれたのも頷けますね。クイーンエリザベスは、一九七九年に南アフリカのプレトリアで開催された世界バラ会議で殿堂入りを果たしています。正妻趣味の園芸家としては、作出国「アメリカ・メキシコ」作、出年一九五四年となっています。どきニ事件の年です。(山下正寿さんより)

「高知でも紙芝居をつくるので貸して下さい」と頼まれたので、「ばらの祈り」をお渡ししました。

焼津平和賞を受賞した「幡多高校生ゼミナール」のOBと現役メンバーに会って交流を深めました



今城さん

橋田さん

山下さん

「核兵器禁止条約」教材 DVD から



「高校生の私が写っているんです」

橋崎さん



杉村さん

(ふうあ)

風暁さん

山下さん

粕谷

日本母親大会 in 高知 思い交流 ☆ 多彩な分科会

分科会「世界と連帯して核兵器廃絶へ」では、全国各地から参加した人々が次々にフロア発言。「ヒバクシヤ国際署名」をすすめた行動や日本政府に禁止条約批准を求める地方議会への請願活動、「平和のための原爆展」のとりくみなどを交流しました。

助言者の太平洋核被災支援センター事務局長・山下正寿さんは、30年以上前にビキニ環礁で操業したマグロ漁船員を高校生と一緒に聞き取りをして以来明らかにしてきたビキニ被災を解説しました。「第五福竜丸以外にもたくさんの漁船が

被災したのは明らかです。核兵器禁止条約は、ヒバクシャとともに核実験被害者の苦悩に言及しています。禁止条約に反対する核保有国は核実験を繰り返してききました。被害は世界中にあります。核保有国の若い世代にむけた学習教材を幡多(はた)高校生ゼミ(高知県)と一緒に作製中です」と報告しました。



フロアからの発言が相次いだ「世界と連帯して核兵器廃絶へ」分科会 26日、高知市



全体会で発言する幡多ゼミの皆さん

◇世界と連帯し核兵器廃絶へ
ビキニ事件今日知る



私の家の小さな庭には、夫愛吉が育てた木や花がところ狭しと育っています。

私は缶詰工場で働くかわら、ときおり訪れてくれる小・中学生や高校生に、ビキニ事件のこと、愛吉のことを、喜んで話をさせてもらいました。

ある日、高知の高校生平和ゼミの生徒たちと焼津の中学生が訪ねてくれました。

後日、高知に帰ったひとりの女生徒のお礼の手紙の中に「愛吉さんが植え、すずさんが大切に育ててきたばらの花を分けていただけませんか」とありました。

私は、愛吉のばらを挿し木にしました。

そして、翌年の3月1日のビキニデーで、高知県の代表に、ばらの苗木をお渡しできたのです。1989年のことでした。

8月25日—26日に、高知県で第64回日本母親大会が開かれました。25日の全体会には4300人が参加。

フィナーレで感動的なことがありました。



来年の日本母親大会は、8月24日25日静岡県で開催されます。(会場はグランシップ・焼津文化センター・あざれあ) 今年の全体会フィナーレで、静岡の代表30人がこの大きな横断幕を持って壇上から訴えました。

(横断幕は藤枝の佐藤佐和子さん(文字)、青木晴美さん(絵)が制作してくれました)



この女性と男性が、高校生の時幡多ゼミに参加していて、焼津の久保山すずさんを訪問しました。

(上記絵本を参照してください)

現役の高校生はこの女性の娘さんで、お母さんと同じように幡多ゼミで平和活動をしています。

彼女が持っているのは、ばらの写真です

すずさんが高知に贈ってくれた苗木をずっと育て続けてきたばらです。

この写真を静岡に贈ってくれました。

「すずさんのばら」のお里帰りです。

実際の苗木は来年の静岡大会に持ってきてくれるとのことでした。



「こんにちは。今日は静岡から114人で参加しています。

(大拍手) 私たちの母親大会は1954年にアメリカが行ったビキニ水爆実験をきっかけに始まりました。静岡はこの時『死の灰』を浴びた第五福竜丸のふるさとです。第65回日本母親大会

をビキニ被災65年目の年に静岡で開催することに大きな意義を感じています。今日は『ビキニの海は忘れない』と高校生の時から活動している高知の皆さんから『すずさんのばら』の写真をいただき大感激です。この喜びをエネルギーにして来年に向け頑張ります。

全国の皆さん、来年は 第五福竜丸のふるさと 静岡へ来てね！」

☆つなぐ・つづける・つたえる☆ 静岡のみなさん
来年の県大会・日本大会、がんばりましょう！

静岡県藤枝と高知県幡多との渡り川となるか

橋本 純

詳しい紹介は他の人がしているので、私は印象に残ったこと、考えさせられたことを中心に書こう。

幡多ゼミナール館で、山下正寿氏が、「高校は3年間と短い大事な時期。映画『ピキニの海は忘れない』で吉永小百合がナレーションをした効果は大きい。高校入学試験の面接で、「幡多ゼミで活動したい」という高校生多数出現。

ここに来れば安心できると思えたようで、不登校やいじめられて表情がない生徒もいたがみるみる変わっていき。ここではなんでも言っていいた、なんでも出せると感じてくれて、それがうれしかった。大学に進学希望する生徒も現れた。

全国に平和ゼミがあるが、幡多ゼミナールは平和に特化せず縛らない。人に会う、自然と出会う、五感を高めることを大切にしている。楽しいから続く。

教師こそ余裕が必要な仕事であり自由が必要、感動が大事。しかし今の教育現場はそれを奪っている、働かねばならない、と。教師こそが自由や感動を伝えねば。

卒業生の橋崎さんも「ため口で話していることにびっくり、自主的なサークルに惹かれた、なかったら不登校になっていたかも」

近藤りかさんも「言いたい放題言っていることに衝撃をうけた。高校は校則など厳しく、まじめなことが馬鹿にされる雰囲気だったがここは違っていた。旅ができることが魅力、しかし羽目を外しすぎると仲間が大泣きし『何のために来たの！？』と批判、それをきっかけにもう一度自分を見つめなおしたり…」と楽しさを語る。

自主的に活動することを大切にし、強制しない。学校での勉強より楽しいと感じつつ、「正しいのかな」と壁にぶつかることもあったという。

高校生が活動することの意味について山下正寿氏は、「自分の足元を見て、地域の問題点を探求し、地域を見る目を育てる、それが学習の出発点」と語る。地域の他者と出会い知ることを通じて、それが自分自身の生き立ちをあらためて客観的に振り返る機会にもなる。どこで自分自身の生きる意味を得てきたか、下手をすると自分の所属する共同体の優位性を確認したり、共同体の中での自分自身の位置を上下関係で確認しがちだが、それらから解き放たれて客観的・批判的に自分自身を見ることができるようになったのだろう。

そんな高校生だからこそ、被爆した船員たちも、高校生になら話せると思い、それを聞いた高校生も、私が聞いたのだから、伝えねば、と思うようになったのだと推察できる。

学校での管理教育・競争的な教育の場では、自分自身の所属する共同体の優位さを確認したり、その中での自分の優位を維持しようとする心性が勝ってしまいがち。それを自覚し、自省することは後回しになってしまうだろう。

「バカと無知 人間、この不都合な生きもの」(橋本純)によると、「バカと無知」は、他人を評する言葉ではなく、自分自身に向ける言葉なのだった。



2022年8月22日（月）には、四万十川を昇り、佐田や岩間沈下橋を見学し、
10時半ころ、十川の先、四万十町大井川1984番地2の村井洋平さん、眞菜さん宅を訪問。



大型風力発電に反対する仲間たちの母子が集まり、子どもたちは遠慮なくはしゃいでいる。
時間がないので、慌てて紹介し、歌を歌ってもらうことにする。準備の間に、薪の風呂、鶏舎などを見学。



僕らの町を、僕らの手で育てよう
僕らの思いを、形にしよう

小雨の中、四万十川の河原で歌ってもらう。

それぞれの心、あふれ出ている
言葉にならない気持ちが
言葉にならない思いが
この肌を通りぬけて伝わっていく
あああ
みずみずしい朝露のように
あの時の
いつの日か出会うと思ったときめきが欲しい
帰っておいで、帰っておいで、帰っておいで
帰っておいで、帰っておいで、帰っておいで
帰っておいで、いつでも帰っておいで
帰っておいで、帰っておいで、あなたのもとへ
あなたの山へ あなたの川へ あなたの海へ あなたの空へ
帰っておいで、帰っておいで、あなたのもとへ



ばらの祈りについて

岡崎航平

そもそも私にとって、縁もゆかりも無いこの土地に来たというのは、ビキニ被災事件（第五福竜丸事件）を中心として、静岡と高知を結びつけている絆、すなわち、2019 年日本母親大会にて、高知から静岡への里帰りとして贈られた「愛吉・すずのばら」を通してのことであった。

ビキニ被災事件と一般的に言えば、1954 年太平洋ビキニ環礁沖で焼津の漁船第五福竜丸がアメリカの水爆実験により被曝し、船員の久保山愛吉さんが半年後に亡くなってしまった事件として知られている。

さらに、高知の高校生を主体とした幡多ゼミナールの活動によって、事件のさらなる全容が明らかにされ、現在では被曝船舶は一千艘以上、放射能汚染も世界中あらゆる場所にもたらされたことが知られている。

幡多ゼミナールの学生たちは、久保山愛吉さんのお宅を訪ね、その記念として、愛吉さん、すずさんが育てたバラの挿し木をもらい受け、高知において平和のバラとして守り伝えてきた。そのバラが 2019 年に、今度は高知から、挿し木苗が静岡に里帰りし、粕谷たか子先生のご厚志もあり、自分がその苗の一部を管理することとなった。

このバラの管理を通してその生命力の強靱さに心打たれる。バラの病害虫というのはひどいもので、今年などは、葉が全て枯れ落ちてしまう程だった。にもかかわらず、今期の剪定を終えると、厳しい冬の寒さを乗り越え、静かに春の萌芽を待ちわびている。その姿は昨年のひどい生育不順をものともせず、既に春の開花を約束するともいうような予感を秘めているように思える。このバラを通して託されてきた思い、核なき世界を願う被爆者の方々の祈りが世代を継承し、今なお静岡と高知を結ぶ働きをしていることに驚きを禁じ得ない。

静岡には広島ドームや第五福竜丸記念館といったような被爆の歴史を伝える場所は少ないかもしれない。しかし、個人が鉢植えや、庭木にして、伝えていくということは、良いアイディアなのではないかと思う。若い人たちにおいては、被爆の歴史の認知の薄れという問題もある。静岡の地にしっかり根をおろし、人びとの心に自然と平和を願う気持ちが醸成せるものとして活用されることを祈る。今なお苦しみが続く被爆者の権利を守るための闘いに敬意を表し、せめてその活動に一石を投じることができればとささやかながら感じている。



私の家の小さな庭には、夫愛吉が育てた木や花がところ狭しと育っています。

ある日、高知の高校生平和ゼミの生徒たちと焼津の中学生が訪ねてくれました。

後日、ひとりの女生徒のお礼の手紙の中に「愛吉さんが植え、すずさんが大切に育ててきたばらの花を分けていただけませんか」とありました。

私は、ばらを挿し木にして、お渡ししました。

高知の旅の最終日は村井夫妻を訪ねて、四万十川上流を登る。川は幾重にも蛇行しており、私の現在住む静岡市の山間部や川根の風景にも心なしか似ている気がする。訪問は、ほんの一時間たらずだったが、地元の子供達としばし思い出深い交流できた。皆で川に入ってナマズを捜す。エビやカニもうようよいた。家には鶏もいて、昔の豚舎を利用して全て平飼いである。旦那さんは家具の職人、椅子に張る革製品も自前というのも驚きである。子どもとっても遊びには事欠かない環境である。

自分が常々思うのは、われわれが自分たちの住む地域の中でいかに自活した環境を作り出せるか、自然の恵みを享受し、職人的技術や文化活動を地域の共有財産として、いかに魅力的な地域を作り出せるかということである。

幡多ゼミナールの理念として、「地域に学ぶ」ということが強調されていた。その面では、村井夫妻の暮らしはその体現のように思う。是非、静岡に帰っても今回見たことを忘れないよう努めたい。